



◆京都ワンディセミナーのご案内◆

テーマ「図書館を使う！：日本と海外」

今回のセミナーでは、図書館とそのサービスのあり方について、利用者と図書館員の視点、さらに海外と日本の視点から迫ってみたいと思います。あらたな目で「図書館」を見直してみませんか？

日 時：5月20日（土）午後1時30分～4時50分（受付 午後1時15分から）

場 所：京都市国際交流会館 3階研修室

Tel:075-752-3010

京都市左京区粟田口鳥居町2-1 京都市営地下鉄東西線蹴上駅から徒歩6分

アクセスマップ：<http://www.kcif.or.jp/jp/footer/05.html>

主 催：大学図書館問題研究会京都支部

参加費：無料

発 表

「大学図書館での体験 - 日中米の比較 -」

李 明剛氏（オハイオ州立大学東アジア語学文学学科・国際交流基金フェロー）

「ヨーロッパの大学図書館 - 情報リテラシー教育を中心として -」

辰野直子氏（京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館）

「見える図書館サービス」（オーストラリアの事例紹介）

富岡達治氏（京都大学附属図書館）

原竹留美氏（京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館）

渡邊英理子氏（京都大学附属図書館）

※終了後、懇親会を予定しています。

○大図研会員でない方のご参加もお待ちしております。

○お申し込み方法については、次ページをご覧ください。

[目 次]

京都ワンディセミナーのご案内	…	1
国立国会図書館に出向して	…	2
大学と高校のあいだ？—高専図書館はこんなところ—	…	4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

○お申し込み方法

5月19日(金)までに

(1)氏名、(2)所属、(3)懇親会参加の有無 をご記入の上、次のいずれかの方法でお知らせください。

1. Web ページでのお申し込み

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/news/seminar20060520sat.html>

2. FAX、メールでのお申し込み

支部委員渡邊 (京都大学文学研究科図書館)

FAX: 075-761-0692 E-mail: nabe@activemail.jp

国立国会図書館に向向して

山下 ユミ

1. はじめに

京都府から国立国会図書館関西館に向向してきて1年が経った。異動が決まったことを聞いて、思わず涙が出たのも今は思い出である。一年経過してようやく振り返る余裕ができたところで、1年間の報告したい。

2. 関西館での業務

1) 関西館の機能

国立国会図書館は国内刊行資料を網羅的に収集して、あまねく国民にサービスする「国立図書館」という役割、また、国会の立法活動を補佐する「国会図書館」の役割両方を果たしている。関西館は、2002年10月に開館した。職員数は130人弱で、そのうち私のように、都道府県や、省庁・国立大学法人などの国の機関からの出向者は10人ほどである。そのほかに、派遣社員、臨時職員、アルバイトなど、多様な形で他にもたくさんの方が働いている。

関西館は、増え続ける国立国会図書館の蔵書を受け止める書庫機能を持つとともに、遠隔利用サービス、図書館協力事業、電子図書館サービスの拠点となっている。関西館の組織は2つの部に分かれていて、Webサイトを収集するWARPや近代デジタルライブラリーなどの電子図書館サービス、図書館協力事業などは「事業部」で行っている。他方「資料部」は、一般的な図書館業務を担当する。関西館に置く資料の選択、発注、受入、整理といった整理関係の部門、それから閲覧、レファレンス、文献複写サービスといった利用者サービス関係の部門を包括している。

関西館の和図書は、調査研究に有用な図書、学術書、参考図書類を中心に集められている。国立国会図書館では、納本制度により国内で出版された資料を収集しているが、基本的には、1部しか納本されなかった場合は東京本館にのみ置かれ、2部以上の場合には1部が関西館に来ることになっている。2部以上納本される資料は一部なので、関西館の資料は、購入されたものが大半である。また、外国雑誌、規格・レポート類や欧文会議録などの科学技術関係資料、アジア関係の資料は関西館で所蔵している。

2) 文献提供課参考係の仕事

私の配属されたのは、資料部の文献提供課参考係である。ここは関西館の資料の選書、レファレ

ンス、利用案内を主な業務とする。もともと関西館は、非来館型図書館を想定していたため、都市部から離れた場所に建設された。インターネットを通じて複写の申込みを受け付けたり、多くの貴重書はデジタル化して公開したりもしているが、参考係では、利用者とレファレンスを通じて直接関わるのが特徴といえる。総合案内カウンターに座ったら、関西館に来館する利用者の調べもののお手伝いをするし、電話レファレンスでも、直接問い合わせに答えるので、利用者の生の声が聞ける部署である。

係員は12人で、人文系・社会系・科学技術系の3つの班に分かれ、選書等、主題別に分かれて行った方が都合のいい業務は、班ごとに行く。私は科学技術班に入ったので、科学技術分野全般(国立国会図書館分類法の頭文字M~S、医学や心理学を含む)について選書することになった。

レファレンスカウンターでの仕事が始まると、所属する班にかかわらず、あるときは歴史、あるときは法律、あるときは電気工学など、あらゆる分野の質問を受けることになる。ほとんど知らないことばかりで、誰かに教えてもらったり、事例集などを見たりしては調べ方を覚えるという繰り返しだが、閲覧室に開架された参考図書類も、少しずつ使えるものが増えてくるのは面白い。また選書の仕事は、単科大学の図書館に比べれば、格段にスケールが大きいし、必要な資料は購入すべきだという考えが定着しているのが嬉しい。予算は国立国会図書館といえども厳しいが、一般の図書館に時々あるような、図書館資料費を削ろうとする行政との戦いはない。また、非常に重要だけれども一般の図書館で購入できないような高額な資料は、国立国会図書館が率先して購入すべきだ、という理由で資料購入を決める場合もあって、そういう視点を持って資料を選択するのは素晴らしいと思った。

いいこと尽くめのようだが、選書では、科学技術全般に関して、日本語の資料以外に、外国語(主に英語)の資料を評価して、選書するのが難しい。それから、利用対象者を想定しにくい。たとえば医学分野で言えば、一般の人が自分の病気について知りたいと思って探す本と、医師が研究のために参考にする本は同じではないけれど、ここでは両方が利用対象者と言える。閲覧室に開架する資料に限って言えば、その資料は来館する人のためにあるわけだが、図書館にはまわりの研究所の人たち以外に、近所に住む人もたくさん来ているようだ。限られたスペースにどんな資料を選んで置けばいいのか?などなど。

レファレンスは多種多様で、他ではわからなかったからと、専門的なことを聞いてこられることも多い。「こんなにいろんなことに興味を持っている人がいるとは!」と感動することもあれば、「世の中には何てたくさん知らないことがあるんだろう」と圧倒されることもある。全てを知っていなくても、どうやってその情報にたどり着けるかを知っておくことが図書館員として大切だが、それすらも大変だ。

3. 出向者としての1年

私は新規採用以来7年間、関西館に来るまでは、医科大学の図書館に勤務していた。初めは英語ばかり、学術雑誌ばかりでとっつきにくかった医学分野だったが、経験を重ねて医療従事者の専門的なニーズに少しずつこたえられるようになってくると、だんだん面白くなってきて、この分野をもっと極めたくなった。それが7年目くらいである。でも私は京都府に採用された図書館司書なので、たまたま7年同じところにいただけで、公共図書館・他の大学図書館等への異動は前提条件のようなものだ。考えてみれば、京都府の職員なのに国立国会図書館で働くことができるなんて、考えてもみなかった幸運である。その上、現在京都府から国立国会図書館に出向している司書は1人だけなのに、こんな私を送り出していただけるなんて、ありがたいことだ。そうは思ったが、異動が決まった後は、要りませんと放り出されたような気分で、しばらく寂しかった。

とうとう4月、私は東京に行って辞令をもらい、そのまま国立国会図書館の新規採用職員に混じって研修を受けた後、関西館に来た。関西館は全体的に若い人が多いが、同じ係の12人も全員20代か30代。国立国会図書館というと、組織が大きくて融通がきかないのでは?と思っていたが、ここにはどンドン新しいことにも取り組みそうな可能性がある気がした。驚いたことに、ここは京都府だというのに、係内で飛び交う言葉に関西なまりがほとんどない。職員は東京本館から異動し

て来た人や、そうでなくても関西以外の出身者が多いためだ。普通に話しかけられているのに怒られているような、冷たくされているような気分になることもあったが、何日も経たないうちに、関西弁で冗談も返せるようになった。

さて、私は新人研修を受けて新規採用の人たちと一緒に関西館に来て、当初は彼らと同じように、「何でもわからなくて当然」と毎日を送っていた。異動は、いったん新人のように何も知らない状態になることかもしれないけれど、どうやら私はそれに甘んじて指示待ち、受動的という楽な選択をしすぎていたようだった。しばらくすると、7年も経験をしてから来ているのに、働きぶりが新人と同じかそれ以下というのは、わざわざ出向してきている意味がないじゃないかと不安に思われてきた。一緒に入った新人たちは、経験はないけれど、みんな若くて体力もあるし、頭もやわらかいし、やる気満々。とてもかなわない気がする。これまでの7年間、年下の後輩を迎えるということは一度もなかったもので、若い人に対して恐れを抱くという経験はなかったが、初めて焦燥感というのがどんなものかわかった。

でも、焦りながら業務を覚えていくうちに、多少は今までの経験の生かし方もわかってきた。医学図書館にいた頃は、医学分野のことについては、まだまだ勉強を始めてもいないくらいだと思っていたのに、関西館に来たら、医学図書館から来た人ということで、相対的にそこにいるメンバーの中では一番詳しい人になってしまい、あれこれ質問をされたり、レファレンスが回ってきたりするようになった。質問をされてもわからないこともあるが、調べて回答する。まだまだとても、この分野なら何でも私にお任せください、と胸を張って言えるわけではないけれど、今までやってきたことは決して無駄になっていないし、引き続き勉強していけばいいんだ、と実感できたのは、とても嬉しいことだった。

4. おわりに

こうして自分の経験を言葉にして読んでみると、今まで誰かが経験してきたことを、私もまた同じようになぞっているだけのようにも思える。でも、こんなにいろいろな感情を自分で体験できるのは、やっぱり素晴らしい。あと1年、与えてもらえばかりでなく、ギブアンドテイクだったと思ってもらえるよう、精一杯仕事をしたい。

やました ゆみ (国立国会図書館関西館)

大学と高校のあいだ? - 高専図書館はこんなところ -

大橋 亜紀子

平成16年4月より、愛知県にある豊田工業高等専門学校の図書館に勤務することになりました。研究者や教員を対象とした大学の研究図書室勤務から、15歳から20歳という子どもから大人になる途上の学生を主な対象とする図書館へ異動することは、楽しみもありつつ、若い学生たちにうまく対応できるだろうかという色々な不安もありましたが、早や2年が経過しました。この支部報を読まれているのは主に大学図書館の職員の方が多く、高等専門学校図書館にはあまり馴染みがないと思いますので、ここでは大学図書館と比較しつつ(自身もまだ表面しか分っていないので)「かるく」ご紹介していきたいと思います。

高等専門学校(通称「高専」)は、中学校卒業の早い年齢段階から、5年間の一貫した専門教育を行う高等教育機関です。大学法人化の時に、国立55高専は独立行政法人国立高等専門学校機構

となりました。高専により設置する学科数や規模は異なり、豊田高専の場合は、本学科には機械工学、電気・電子システム、情報工学、環境都市工学、建築の5学科があり、その上に3つの専攻科(2年間)があります。学生数は、2005年6月時点では本学科生1,111名、専攻科生53名です。それに対して、教員数は約80名、事務職員は約50名で運営しています。

中学を卒業したばかりの学生は、一般の高校であれば、「生徒」と呼ばれるところを、高専では大学同様、「学生」と呼ばれます。これは、学生寮を備え、親元を離れて生活し社会性や協調性を学び自立性を養うという教育を行っていることと無関係ではないと思います。豊田高専の場合は、一年生は基本的に全員寮に入り、全体学生の半数以上は寮で生活しています。本学科を卒業後は、就職する学生は半数で、後の半数は国立大学への編入学か、専攻科への進学を選択しています。

そのような中で、図書館が果たす役割は、大学図書館とは多少異なってきます。教員は教育者であると同時に研究者でもあり、学生も専攻科生になれば論文を作成しなければならないので、大学図書館と同様、専門書や電子ジャーナルも必要です。でもそれだけでは高専図書館として十分ではありません。10代後半という多感な時期を高専で過ごすので、専門教育を受けてその技術を磨くだけではなく、教養を深め、世の中が見渡せる人物に成長する機会を提供するのも、高専図書館の役割です。特に最近、若者の活字離れが進んでいるといわれるように、本に興味のない学生も多くなります。そのような読書に馴染みの無い学生には、まずは図書館に足を運んでもらうことが第一だと考え、より多くの学生に利用されることを心がけています。その方策として、高専図書館では視聴覚資料を充実させたり、雑誌コーナーにコンピュータや電子関係の専門雑誌だけでなく、一般的な雑誌も揃えたり、漫画を置いたりする方法が多くとられています。

学生の利用促進のために、高専図書館で一般的に行われているイベントの一つに、ブックハンティングと呼ばれるものがあります。これは、学生を書店に連れて行き、そこで直接本を選定するというものです。学生希望図書は年間を通して随時受け付けていますが、この制度を使う利用者はどうしても普段から図書館を利用している学生に限られてしまいます。ブックハンティングでは、各クラスに1名～2名居る学生図書委員に意見を集約してもらった後、普段はあまり足を運ぶ事の無い大型書店へ出向いて直接図書を選定するので、より多くの学生の意見を反映することができ、貸出も順調に伸びています。また、高専によっては学生図書委員会が主導して、古本市を開催したり、図書館広報の原稿作りに関わらせたりすることで、図書館と学生の距離を近づけているところもあるようです。

他にも、貸出ベストリーダーを作成したり、教官からの推薦図書を購入してディスプレイしたり、ポスターを作ったりしています。本校の場合は、図書館は正門近くにあり、その先に教室、食堂、学生課、学生寮という配置になっており、寮生の生活動線から外れてしまっています。その中で、わざわざ図書館まで足を運んでもらうには、やはりどうしても授業と関連した資料を図書館に配置することが必要となってきます。

その一つとして、検定用の学習参考書を多く所蔵しており、数学検定の場合は、副本などを含めて50冊以上を図書館に置いています。高専は単位制ですが、授業時間の関係で単位を落とした場合の再取得が容易ではありません。そのため、各種検定を受けることで単位を認定してもらうという方法がよくとられます。数学検定のほか、デジタル技術検定や電験(電気主任技術者)のものもいくつかおいてあり、検定期間になるとほとんどが貸し出されています。

もう一つは、英語多読用教材の配置です。高専の卒業生は、専門知識を有している事では定評があるのですが、一般学科の弱さ、特に英語能力の不足が指摘されていました。そのため、近年は英語教育にも力を入れており、その一環として、易しい英語の本から辞書を引かずに読み進めるSSS(Start with Simple Stories)の多読法を実施しています。この多読教育は、本校を含めいくつ

かの高専で実施されています。教材となる洋書は、図書館の予算を使うのではなく、教員が獲得してきた様々な特別予算を使い、教員が選定した図書を受け入れしています。

初心者レベルの本は、英語はタイトルだけで、中身は5, 6ページの絵だけ、というものです。それから、文字、ページ数を少しずつ増やした本に取組み、最終的にはハリポッターやシドニー・シェルダンのペーパーバックに取組みます。それらの教材を図書館で扱っていますが、平成15年末から受け入れ始め、現段階では約6,800冊を用意しています。多読の授業では、一コマ90分の授業の内、半分の時間を図書館で洋書を読む事に費やします。教員は、その間、学生たちに選択する図書のアドバイスを行います。授業時間以外でも多読用図書を借りていく学生も多くいます。多読授業の展開により、分野別の貸出冊数では、語学が突出して増加しましたが、学科別に比較検討したところ、多読の授業を定期的実施している学科については、語学以外の分野、文学や工学分野に関しても貸出冊数の伸びがみられました。

また、本校では以前から地域住民の方にも貸出・閲覧などのサービスを行っています。これまでは利用は少なかったのですが、この多読用図書については、公共図書館で整備しているところはまだまだ少ないため、地域住民の方にも多く利用していただけるようになりました。

一方で、大学図書館と比較すると、研究支援的側面が弱いのは否定できません。これも高専により状況は異なりますが、本校の場合、外国雑誌は全て直接研究室へと配架され、製本時に図書館に戻ってくるため、学生の目に触れることはほとんどありません。近年、長岡技術科学大学の主導により、長岡技科大の電子ジャーナルや文献データベースのコンソーシアムに高専も参加できるようになり、高専でも負担できる程度の金額でいくつかの電子ジャーナルなどを使う事ができるようになりました。本校でも、私が赴任したちょうど2年前からScienceDirectとSwetsScanを使うことができるようになり、ようやく環境が整ってきました。今のところ年度始めに教員への利用講習会を行っています。まだ利用率が高いとは言えないため、より広く周知する必要性を感じています。また、専門書についても毎年、各学科の教員に依頼して選書を行っています。予算的なものもあり十分とはいえません。この点に関しては、東海地区大学図書館協議会の暫定協定により、学生証があれば利用できる大学図書館が多いため、こちらのサービスを随時案内しています。

大体、こんな感じで、大学図書館と高校図書館の要素の両方を取り入れつつ運営しています。大学との差は、他にも「図書」が資産として計上されていない(資産外物品として規定されている)。ただ現段階では、この辺りは高専により解釈が分かれ、全て消耗品扱いにした高専もある。ちなみに、本校は、従来通り備品と消耗品に分けて、両方とも蔵書データベースに登録している)とか、図書館システムがリースではなく買い取りになっていて予算の問題でメンテナンス契約も結べていないとか、管理運営上の細かい差は色々あります。でも、現段階での私見ですが、基本的に高専図書館は大学図書館と同じ様に運営できるように心がけつつ、読書活動を活性化するよう色々な働きかけをしていけば良いのかな、と考えています。現在では、多くの高専が一般利用者にも図書館を開放しています。皆さんも、機会があれば是非高専と、高専の図書館を覗いてみてください。

おおはし あきこ (豊田工業高等専門学校図書館)

◇ 京都支部報へ投稿しませんか ◇

京都支部では、会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

原稿の規格、送付先等、詳しくは、以下の京都支部 Web サイト支部報投稿案内ページをご覧ください。採用の際はあらためてご連絡させていただきます。

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/kaihou/kitei.htm>

ご不明な点は、京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp) まで、お問い合わせください。